

—時代のなかの学生と学問—

早稻田で

學ぶ



大学史資料センター秋季企画展
—時代のなかの学生と学問—
早稲田で学ぶ

はじめに

いつの時代も、早稲田の学生たちは学問と真摯に向き合ってきました。講義の内容を書き記した学生たちのノートが、その何よりの証です。

本展示では、受講ノートをはじめ、学生たちが残した学びの記録を紹介しながら、東京専門学校の開校当初から戦後直後まで、その時代、その時代のなかで学びつづけてきた学生たちの姿をたどります。

1882年、80名の学生を迎えて出発した東京専門学校は、開校から20年を期して「早稲田大学」を名乗り、その後、さらに約20年を経て、大学令に準拠した正式な大学となります。この間に学科や附属機関が拡充され、校舎や図書館も整備されて、学生数は10,000名を越えました。

東京専門学校が早稲田の地に開校したとき、日本にはまだ、憲法も議会もありませんでした。早稲田大学がその内容を充実させていく過程は、日本が近代的諸制度を整備し、戦争を繰り返しながら大国へと変貌を遂げていく過程でもあり、変わりゆく大学の姿は、国家と社会の変容を反映するものでもありました。近代化の過程から、デモクラシーと「改造」の時代を経て、アジア・太平洋戦争へと至る時代のなかで、早稲田の学生たちは、何を、どのように学んでいたのでしょうか。

今、早稲田大学を含む多くの大学ではキャンパスの利用が制限され、多くの学生が思いもよらなかつた日々を送ることを余儀なくされています。このささやかな展示が、学びの場としての大学の役割を見つめ直すきっかけとなり、また、不自由な学生生活を強いられている皆さんを少しでも励ますものとなれば幸いです。

2020年 10月

早稲田大学大学史資料センター

発端總論

歴史ト如何モチテ指シテナヤト言ヘ一般ニ之カ足解ヲアルル人間生涯ノ事跡ヲ記録シ
モ云フナリ之ヲ又言ス等ハ有名な人物クナリ社會ノ進歩上最モ与リテ有事跡ヲ
記載シテ云フナリ而テ世人間ニ及李問ニ種ナリ仮令人種有所研究ス者又國
々言語調査ノ者アリ此寺ノ奉向ノ歴史尤モ著キ区别ハ即テ歴史也テハ已ニ社會
ニ成立シテルト他方ニ於テ木社會ノ成立ニアリルトノ点即星ナリヒテ人種ノ棲息スル世
批テ何ナ人種ク社會ヲ改良文明ニ赴クシム付テ尤モ与リテカアリヤト問フニ白哲種
ト云ルナリ得ス此白哲人種高麗三十六即 欄外通加シ

歴史所定ノ目的尤種ナリ且モ今ニ至ルノ講究セシム所ニ社會ノ開達進歩ニシテ
而肩ノ深究セテナリ既ニ言ヒシ如白哲人種ハ人文、航海、土産其中ニ就テモ著シテ至列
人種ナリモア云故ニ當時歐米各國開化ハ皆些人種也ナリ又五部ノ如キハ白哲人種
ニアリ且モ古來ヨリ開明ナリミ國ナウギセミナク人種ハ宗教、舞達、關係等モノニシテ世
界ニ宗教皆人種也ナリ（三大教耶蘇猶太回教）ハミナリ人種ハ其國
支那境内外ナリ他玉開化及ヒス干能サリキ予輩ハ世開化進歩ニ蒙キ關係有ル

近代化のなかで

—1880~1910年代—

1882年10月、東京専門学校は、わずか80名の学生を迎えて出発した。小野梓が掲げた「学問の独立」の理念には、外国の学問からの独立という意味が込められ、東京専門学校では、外国语で教育が行われる東京大学(帝国大学)に対し、日本語によって専門学を速成する教育方針が採られた。

「学問の独立」のもう一つの含意は、政治からの独立にあり、学内には学生の個性を尊重する自由な雰囲気があった。自由民権運動から憲法の発布、そして議会開設へと続く近代国家建設の過程のなかで、初期の学生の間には、権力におもねらない反骨精神、反官僚意識、強い政治志向が育まれた。授業も、そうした学生の気風を醸成する基盤となった。擬国会として知られる政治経済学科の「国会演習」は、議会開設に先んじて始められ、一授業の枠を超えて、学内外の注目を集め早稲田の名物イベントとなつた。

1902年10月、東京専門学校は開校20周年を期して「早稲田大学」へと改称する。大学部には政治経済学科、法学科、文学科に続き、商科、理工科が新たに設置された。また、附属学校として、専門部や高等師範部、工手学校などが次々に発足した。さらに、国内改革の一環として日本への留学生派遣を推進した清国の留学生を迎える特設機関として、清国留学生部が設置された。早稲田大学は多種多様な学生が国内外から集う一大教育機関へと成長を遂げ、学生数は、開校から30年を迎える頃までに、大学部だけで3,000名以上、附属学校・機関を加えれば10,000名に達した。

学科・附属学校等の拡充と学生数の増加に合わせて、校地の拡大と新しい校舎の建設、学習環境の整備も進んだ。早稲田大学に改称した1902年には、書庫・閲覧室の2棟からなる図書館が開館した。1911年には、教員の研究室のほか、理工科の教室・実験室や階段教室を備えたレンガ造の恩賜記念館が竣工した。開校当時の校舎もまだ健在だったが、周囲に田圃が広がるのどかなキャンパス風景は、着実にその姿を変えていった。

左: キャンパス風景(校庭周辺)1912年頃

右: 田中穂積の講義風景(大学部政治経済学科)(「政治経済学科卒業記念帖 大正6年」1917年より)



年	月	事項(太字は国内・世界の動き)
1882年	10月	東京専門学校開校
1886年	1月	小野梓死去
1888年	10月	擬国会始まる
1889年	2月	大日本帝国憲法発布
1890年	11月	帝国議会開設
1894年	8月	日清戦争始まる
1898年	6月	第1次大隈内閣成立
1901年	4月	高等予科(大学部予備門)発足
1902年	10月	創立20周年記念式。早稲田大学に改称。図書館開館
1903年	9月	高等師範部発足
1904年	2月	日露戦争始まる
1904年	9月	大学部商科発足
1905年	9月	清国留学生部発足
1907年	4月	大隈重信が総長に就任
1907年	10月	創立25周年記念式典。大隈重信銅像(大礼服姿)除幕式。校歌を制定
1909年	9月	大学部理工科発足
1911年	5月	恩賜記念館竣工(1918年、増築完了)
1912年	1月	中華民国成立(2月、清朝滅亡)
1913年	10月	創立30周年記念式典で大隈重信総長が教旨を宣言
1914年	4月	第2次大隈内閣成立
1914年	7月	第1次世界大戦始まる
1917年	3月	ロシア革命起こる
1917年	6月	天野為之学長の後任と大学改革をめぐる早稲田騒動起こる
1919年	3月	朝鮮で3・1独立運動起こる
1919年	5月	中国で5・4運動起こる

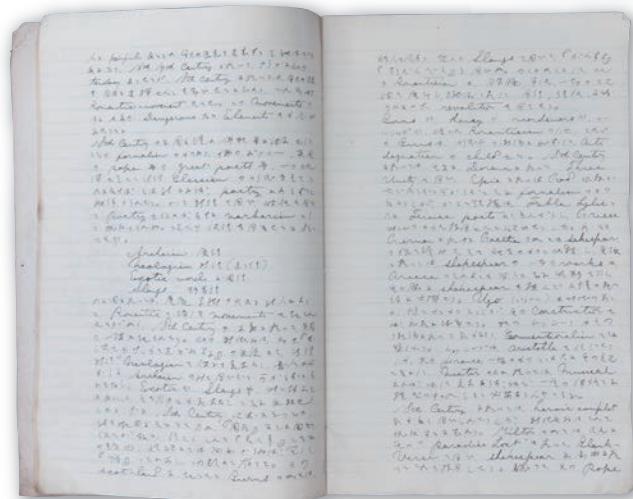
図書館閲覧室風景(「政治経済学科卒業記念帖 大正4年」1915年より)

擬国会の様子(同上)

講師数は次第に増加し、創立15年を迎えた1897年には約80名を数えた。学外からも優秀な研究者が出講してきていた。織田萬は1899年より京都帝国大学教授を務める日本行政法学の祖、坪井正五郎は日本初の人類学者にして東京帝国大学理科大学教授。



開校当初の教壇に立ったのは、東京大学を出たばかりの高田早苗・天野為之・坪内逍遙ら。薄給で、かつ、多数の科目・講義時間を受け持っていた。



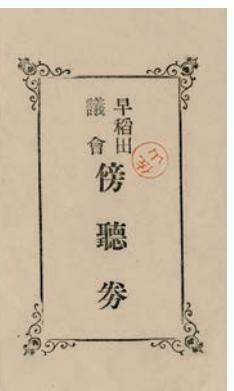
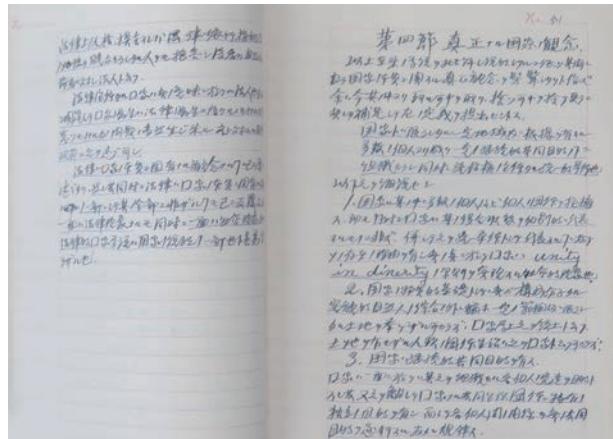
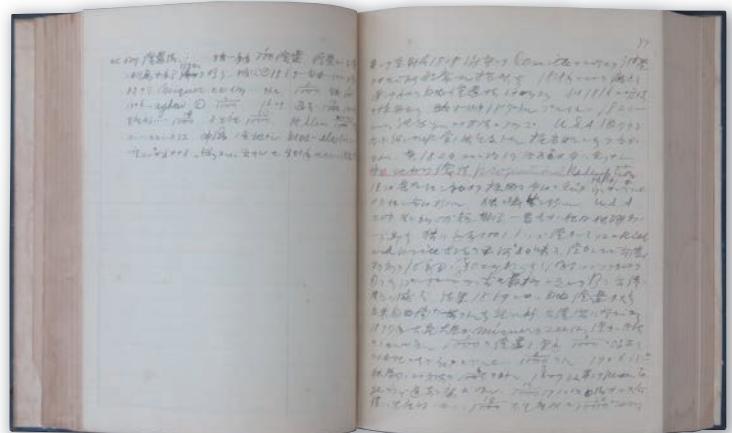
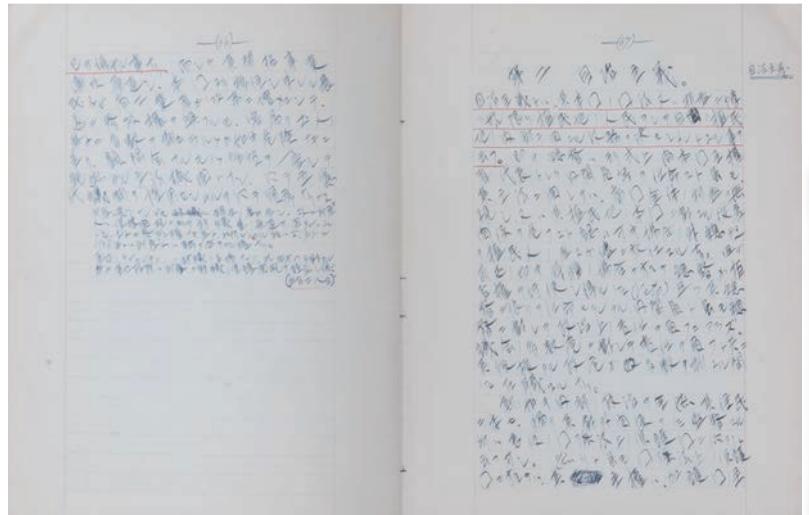
上:高田早苗「歐米史」受講ノート(1882年) 山田英太郎(1885年邦語政治科卒)

中:天野為之「國債論」受講ノート(1888~1890年頃) 大塚藤一郎(1890年邦語行政科卒)

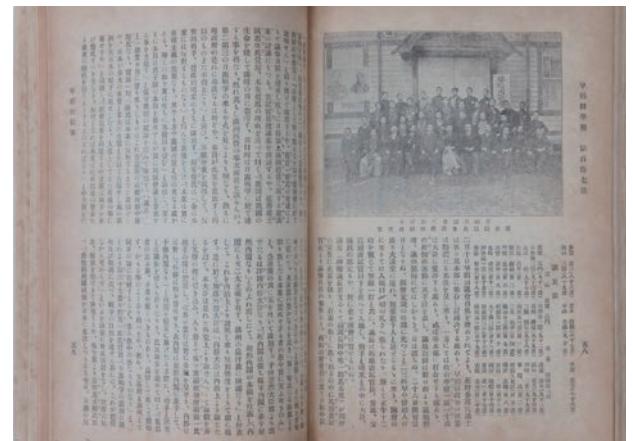
下:坪内逍遙「Concerning Romanticism」受講ノート(1903~1905年頃) 西村真次(1905年国語漢文及英文学科卒)

清国留学生部における毎日の授業内容と担当教員が記される。

教場日誌 庚班(1905~1910年頃) 清国留学生部



政治経済学科の授業「国会演習」において行われた擬国会は、「早稲田議会」の名で呼ばれるようになり、教員や招聘された（実際の）議員・官僚らが閣僚・政党の代表・政府委員役を、学生が一般議員役を務めた。擬国会には、毎回、数千の聴衆が学内外から集まつたが、1920年の大学昇格に伴うカリキュラム再編に伴つて終焉を迎えた。



早稲田議会（擬国会）開催通知・傍聴券 1904～1905年：上
第13早稲田議会の模様を詳報する『早稲田學報』早稲田学会発行 1905年5月1日：下

創立20年を経る頃には、早稲田出身の教員が登場する。論壇でも活躍して大正デモクラシーを牽引した大山郁夫は永井柳太郎と学生時代の同期。永井と田中穂積の講義振りには、「先生こそは雄弁中の鏘々たるものにて候…この雄弁を以て社会政策と殖民政策との深遠なる研究を発表す。学生の人気の翕然として集る」（永井）、「立派に水を流す様なる弁舌と、キビキビしたる態度とが累をなして不評判なるはお氣の毒にて候」（田中）といった批評が残る（雑誌『青年』1914年8月号）。



学生の姿をユーモラスに紹介する本書では、「ナマケ振り」を天下に誇る文科、寒い旧校舎でオットセイのように厚着をする政治科、ストーブのある新校舎で朝から晩まで勉強に没頭する理工科、「高襟」（ハイカラ）で要領のよい商科、などと紹介される。学科の新設と学生の増加は、学科それぞれに特徴的な氣質を生み出していく。

上：永井柳太郎「植民政策」受講ノート（1910～1912年頃）高野清八郎（1912年専門部政治経済科卒）

中：田中穂積「財政学」受講ノート（1917～1918年頃）金澤雅志（1918年大学部商科卒）

下：大山郁夫「国家学原理」受講ノート（1915～1917年頃）勝田友三郎（1917年大学部政治経済学科卒）

校風漫画 近藤浩一路著、博文館発行 1917年

「改造」の潮流と戦争の足音

—1920~1930年代—

デモクラシーの潮流のもと、1920年代には社会的諸矛盾の是正を求める動きが広まった。労働運動や普選運動をはじめとする様々な運動が高揚し、社会主义が広がり、「改造」が時代のキーワードとなった。早稲田大学は、こうした新思潮の震源地の一つとなった。他方、産業構造の変化と学校教育の浸透は、サラリーマンのような新たな社会階層を生み出し、大衆社会化が進展した。

1920年2月、早稲田大学は大学令に基づく正式な大学となる。早稲田にはさらに多くの学生が集うようになり、その数は、1920年代半ばの時点では14,000名余りとなっていた。

キャンパスの景観も大きく変貌した。学生数と蔵書の増加に応えるため、1925年に新図書館(現在の2号館)が開館した。1930年代に入ると、明治期に建てられた木造校舎に替わって、鉄筋コンクリート造の耐久校舎が続々と竣工した。

教育内容・教授方法の充実も図られた。大学昇格に際し、早稲田大学は教育の基本方針に「自知自発」を掲げ、自学自習の精神を重視した。この方針に沿って、自修的研究と詰込主義排除を旨とする学制改革が実施され、選択科目や演習討論が拡充された。

社会運動・政治運動が高揚する一方で、治安当局はそれらの運動や思想への警戒と取り締まりを強化していく。とりわけ、社会主义・共産主義への弾圧は徹底され、その波はキャンパスにも及んだ。1923年には佐野学・猪俣津南雄両講師の研究室が搜索され、学内外に強い衝撃を与えた。大学の運営も、次第に、政府や治安当局の意向を無視できないものとなっていった。「改造」の思潮を主導し、学生にも大きな影響を与えた大山郁夫は、1927年、無産政党である労働農民党中央執行委員長就任を機に、学生の留任運動にもかかわらず解職された。同時期、新聞学会・雄弁会など多くの学生諸団体が解散に追い込まれた。

1931年9月の満州事変勃発を機に、日本は国際的な孤立と戦争への道を進む。その過程で、教育に対する統制も強められた。1927年から始まった軍事教練には、事変後、野外教練が加わった。1936年には、早稲田でも御真影と教育勅語の謄本を奉戴し、紀元節・天長節・明治節の奉祝行事を実施するようになった。

年	月	事項(太字は国内・世界の動き)
1920年	2月	大学令に準拠した大学に昇格
1921年	4月	初の女子聴講生入学
1922年	1月	総長大隈重信死去
1922年	3月	鉄筋コンクリート造の第二高等学院校舎竣工(耐久校舎の嚆矢)
1923年	5月	一部学生による軍事研究団が発足し、反軍国主義の学生と論戦・乱闘(軍事研究団事件)
1923年	6月	治安警察法違反の嫌疑で佐野学・猪俣津南雄の研究室搜索される(研究室蹂躪事件)
1923年	9月	関東大震災
1925年	4月	治安維持法公布
1925年	5月	普通選挙法成立
1925年	10月	新図書館(現2号館)開館
1927年	1月	労働農民党中央執行委員長に就任した政治経済学部教授大山郁夫を解職(大山事件)
1927年	6月	配属将校が着任し軍事教練始まる(講話中心)
1928年	6月	新聞学会解散(翌年にかけて学生諸団体の解散相次ぐ)
1928年	10月	演劇博物館開館
1931年	5月	旧文学部校舎(本学最初の校舎)を東伏見運動場に移築し、跡地に鉄筋造の新校舎が竣工
1931年	9月	柳条湖事件(満州事変始まる)
1932年	4月	自修的研究と詰込主義排除を基調とする学制改革(カリキュラム再編)を実施
1932年	5月	5・15事件起こる
1932年	10月	大隈重信銅像(ガウン姿)・高田早苗銅像除幕式
1933年	7月	軍事教練で野外教練始まる
1935年	10月	正門が現在の位置へ移動
1936年	1月	この年から紀元節・天長節・明治節に奉祝行事を実施することを決定
1936年	2月	2・26事件起こる

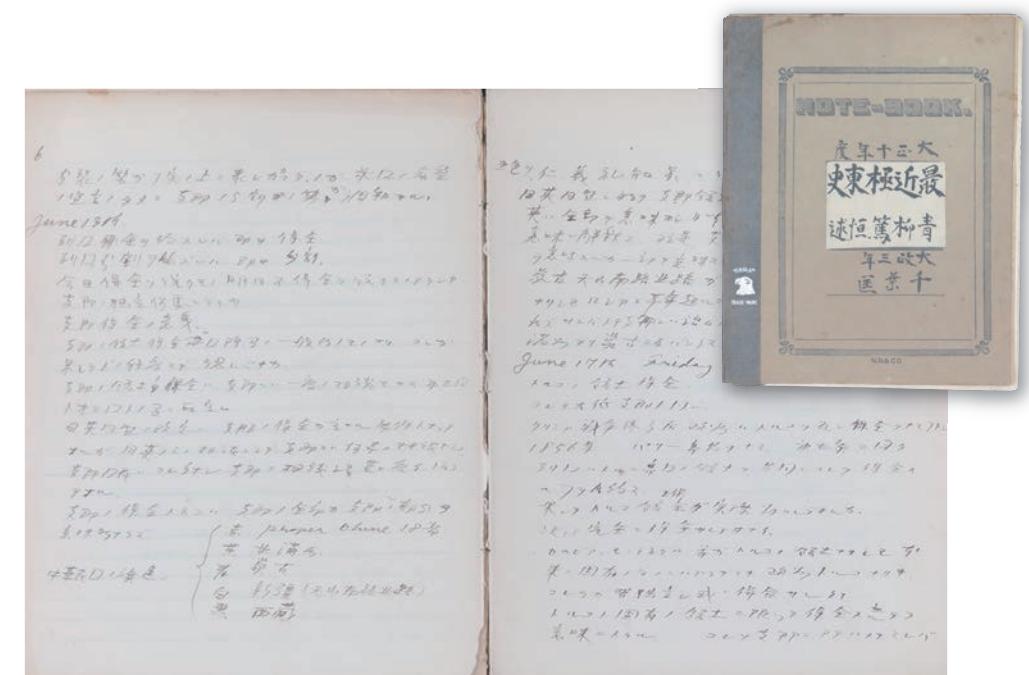
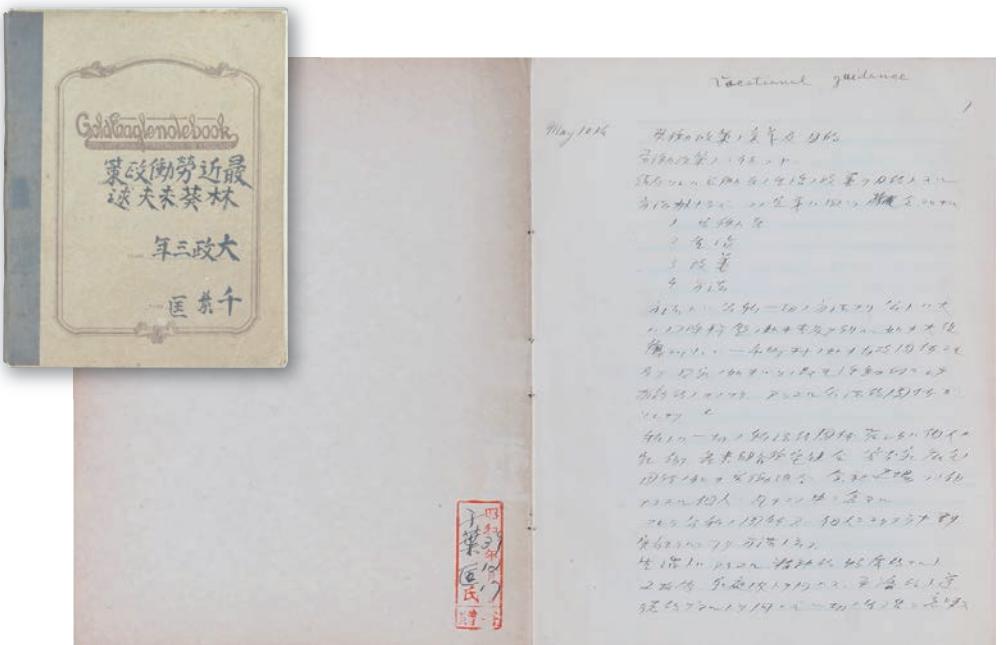
左: キャンパス風景(大隈講堂からの眺望)(「商学部卒業記念写真帖 昭和12年」1937年より)

右: 島田孝一の講義風景(商学部)(同上)

久保田明光のゼミナール風景(政治経済学部)(「早稲田大学政治経済学部経済科卒業記念」1937年より);左

新図書館閲覧室風景(同上);右



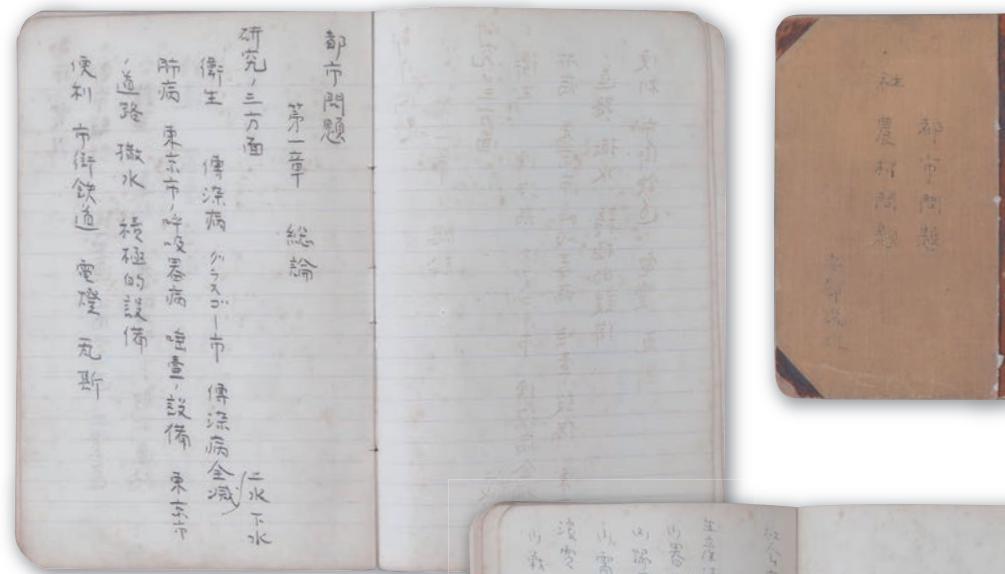


上：新図書館閲覧室風景（「商学部卒業記念写真帖 昭和12年」1937年より）
下：「新解釈学生日記」（「法学部卒業記念 昭和7年」1932年より）

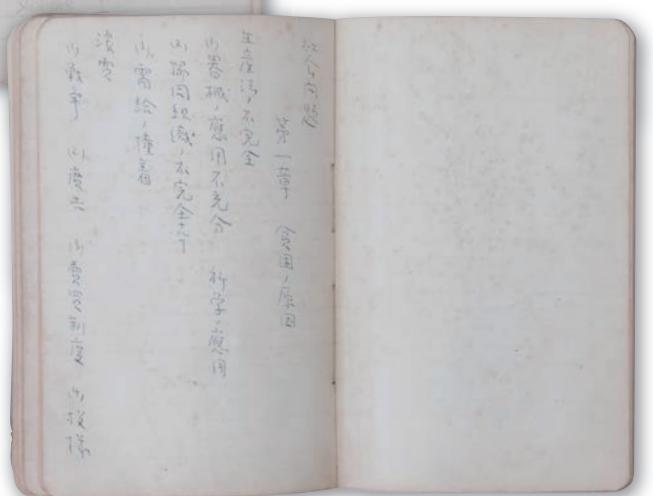
林癸未夫「最近労働政策」受講ノート（1921年）千葉匡（1922年政治経済学部卒）：上
青柳篤恒「最近極東史」受講ノート（1921年）千葉匡（1922年政治経済学部卒）：下



左：「大隈会館婦人応接室に杉山先生を聞くで談論する」（『早稲田大学政治経済学部経済科卒業記念』1937年より）
右：「下宿に集ってノートを引合させる」（同上）



1899年に同志社より早稲田に移った安部は、資本主義社会の抱える問題の解決を目指し、社会問題・都市問題を講じた。その講義は、「直立不動の姿勢を以て、グラスゴーの市設病院はと都市問題を講ずる処は、ほんに懐しい小父さんに候」と評された（雑誌『青年』1914年8月号）。

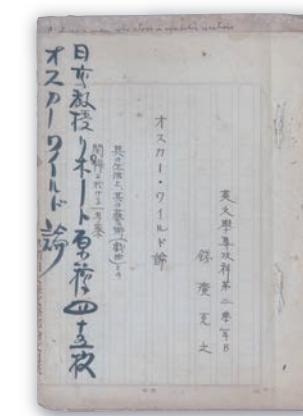


「都市問題 農村問題」講義ノート（1913～25年頃）安部磯雄：上
「社会学」「社会問題」講義ノート（1920～1923年頃）安部磯雄：下

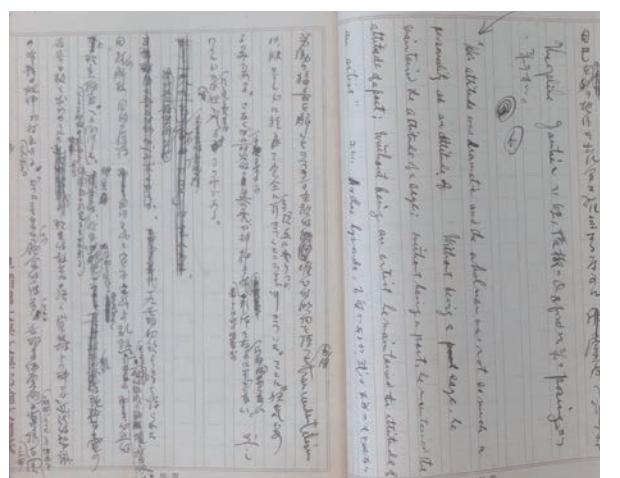


理工学部採鉱冶金学科のカリキュラムには、鉱山・炭鉱での実習が組み込まれていた。学生は約1ヶ月間、実習先の鉱山・炭鉱に滞在し、採掘技術や労働状況を克明に記録した。

理工学部採鉱冶金学科の鉱山実習報告書 1910～30年代



「オスカーワイルド論」（日高只一講義課題）課題レポート草稿（1929～1931年頃）錢廣克之（1932年文学部卒）



戦争と荒廃、そして復興

—1937~1952年—

1937年7月、日本は中国との全面戦争に突入する。総力戦体制の構築が進み、あらゆる人材と資源が戦争遂行のために動員されるなかで、早稲田大学もまた、国策に順応していった。

戦時下で新設された鋳物研究所や興亜経済研究所などの研究機関、あるいは、「東亜の文化開発に雄飛すべき青年学徒を養成」するとした特設東亜専攻科は、戦争遂行のための技術や理念、人材を提供する役割を担った。その一方、反戦的、自由主義的、反天皇制的と見なされた教員に対する当局からの圧迫が強まった。津田左右吉や京口元吉が大学を追われ、帆足理一郎・西村真次・林癸未夫の著作が、発禁・絶版や一部削除などの処分を受けた。

カリキュラムも戦争遂行に適合的なものへと再編された。軍事教練は必修科目となり、「国是即応、体力鍛磨、集団訓練」を目的とする学徒錬成部が新設された。学生が学問と向き合う日常は次第に切り詰められ、やがて、戦争一色となった。日本が対米英開戦に踏み切った1941年12月には繰り上げ卒業が始まり、在学期間を短縮された卒業生が戦場へと赴いていった。1943年には、それまで学生に与えられていた徴兵猶予の特典が廃止され、5,000名余りの文科系学生が一斉に入営・応召した（学徒出陣）。留学生に対する軍需工場や建築現場への勤労動員も強化された。戦争末期には、国民学校初等科を除く全教育機関で授業が中止されるに至り、早稲田大学もその教育機能を停止した。

戦争はキャンパスにも大きな被害をもたらした。1945年5月25日の空襲によって、恩賜記念館や大隈会館（旧大隈邸）をはじめ、レンガ造・木造建築は壊滅的打撃を受けた。新しい耐久校舎の被害は比較的軽微だったが、キャンパス全体の3割が損害を受け、多くの校舎が使用不能となった。

それでも、戦争終結直後の1945年9月には、灯火管制によって窓ガラスがタールで塗りつぶされたままの薄暗い教室で、授業が再開された。戦地や動員・疎開先から、徐々に学生も帰ってきた。こうして、早稲田に再び、学問に勤しむ学生たちの姿が戻ってきた。

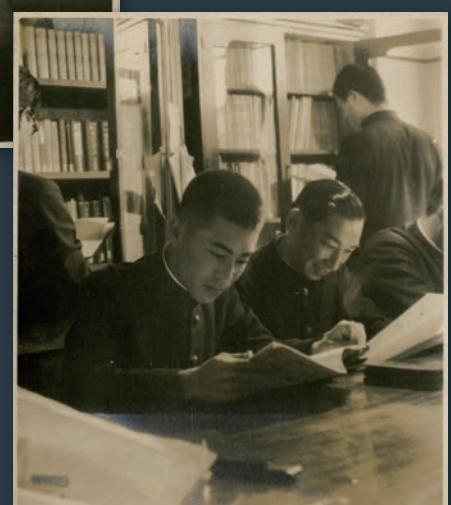
年	月	事項（太字は国内・世界の動き）
1937年	7月	盧溝橋事件（日中戦争始まる）
1937年	11月	教旨を刻んだ建学之碑と国旗掲揚場の除幕式
1938年	4月	国家総動員法公布。「東亜の文化開発に雄飛すべき青年学徒を養成」を掲げる特設東亜専攻科設置
1938年	10月	鋳物研究所開所
1939年	2月	女子の学部入学を認めるため学則を変更（4月、4名の女子学部生が入学）
1939年	4月	軍事教練が学部で必修科目化
1939年	9月	第2次世界大戦始まる
1940年	1月	当局に学説を問題視された文学部教授津田左右吉を解職（津田事件）
1940年	10月	「国是即応、体力鍛磨、集団訓練」を目的とする学徒錬成部を新設
1940年	11月	興亜経済研究所開所
1941年	8月	早稲田大学報国隊が結成され学徒勤労動員始まる
1941年	12月	対米英開戦（太平洋戦争始まる）。修業年限を短縮した繰り上げ卒業始まる
1943年	9月	学生に対する徴兵猶予特典を廃止
1943年	12月	文科系学生・生徒約5,000人が入営（学徒出陣）
1945年	4月	国民学校初等科を除く学校授業を向こう1年間停止
1945年	5月	空襲により恩賜記念館・大隈会館（旧大隈邸）など焼失
1945年	8月	日本がポツダム宣言を受諾して戦争が終結。連合国軍総司令部（GHQ）設置
1945年	9月	授業再開
1946年	6月	GHQ指示のもと、軍国・国家主義者追放のための教員適格審査を開始
1946年	11月	日本国憲法公布
1947年	3月	教育基本法・学校教育法公布
1947年	10月	大山郁夫、15年間のアメリカ亡命生活を終え帰国（翌年、本学に復職）
1949年	4月	学校教育法に基づく新制早稲田大学の設立。教旨を改訂して「立憲帝国の忠良なる臣民として」の語句を削除
1951年	9月	サンフランシスコ講和条約調印（翌年4月、発効しGHQによる占領終わる）

左：軍事教練の様子（「商学部卒業記念写真帖 昭和12年」1937年より）

右：空襲で被害を受けた文学部校舎（早稲田大学図書館所蔵「早稲田大学戦災写真」より）

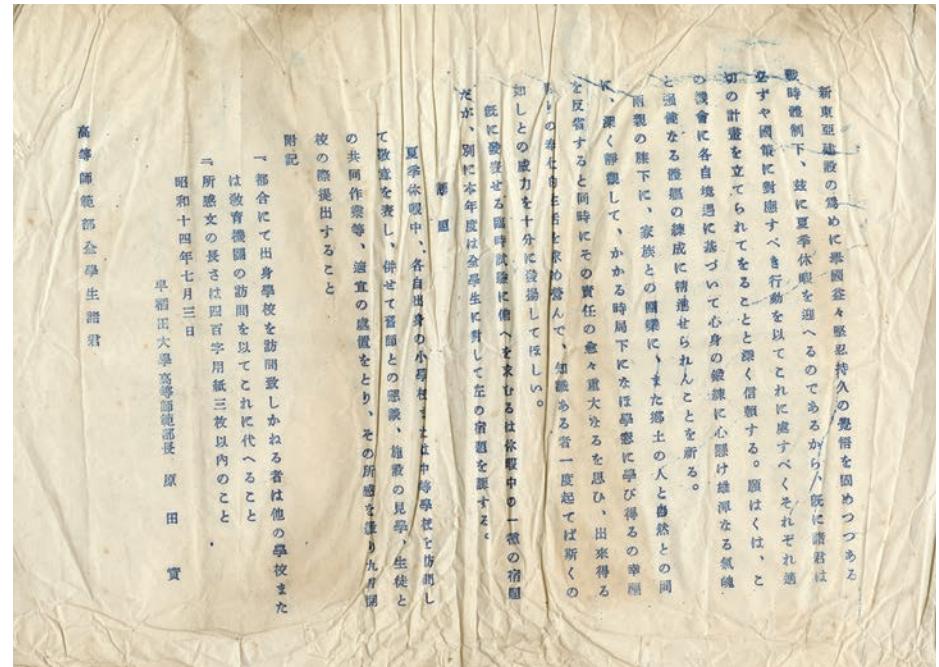
空襲で倒壊した理工学部校舎（早稲田大学図書館所蔵「早稲田大学戦災写真」より）；左
講義風景（理工学部）（「昭和26年度卒業記念 早稲田大学第一理工学部機械工学科」1951年より）；右





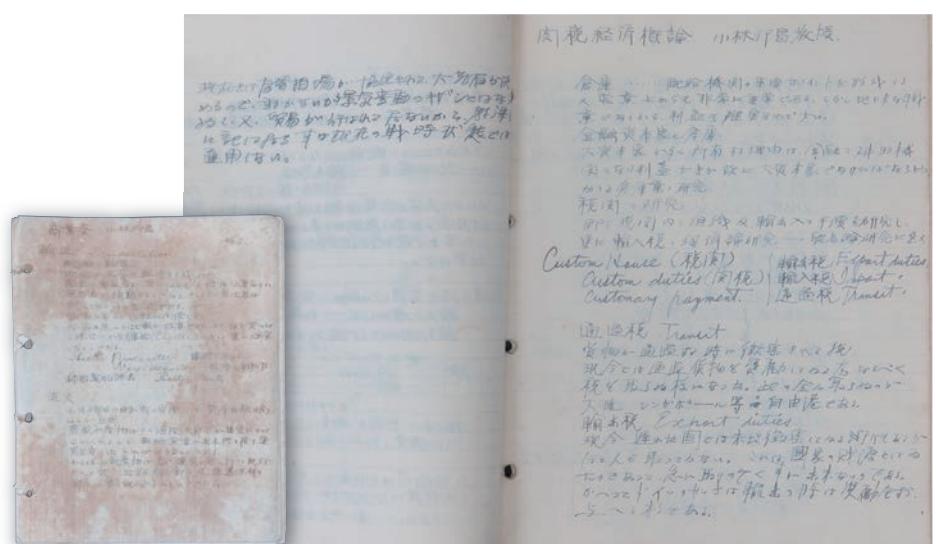
写真には、「講義を聞くばかりが吾々学生の本分ではない。…研究発表こそ実に学生の最も面目を發揮するもの」(中央)、「大学には休講とブランクの時間と云ふものがある。学生は之らの時間を無意に過ごしてはいけない」(下)と、本人による解説が入る。

ある学生の「通学の一日」1941年



夏季休暇を迎える心構えとして、「かかる時局下になほ学窓に学び得るの幸福」への自覚などが説かれる。

夏期休暇中の課題 (1939年7月3日) 高等師範部長原田實



筆記者の川村芳太郎は繰上げ卒業後の1943年末に入営。
1945年5月1日、沖縄で戦死。

小林行昌「商業学」ほか受講ノート (1941~1943年頃) 川村芳太郎 (1943年専門部商科卒)

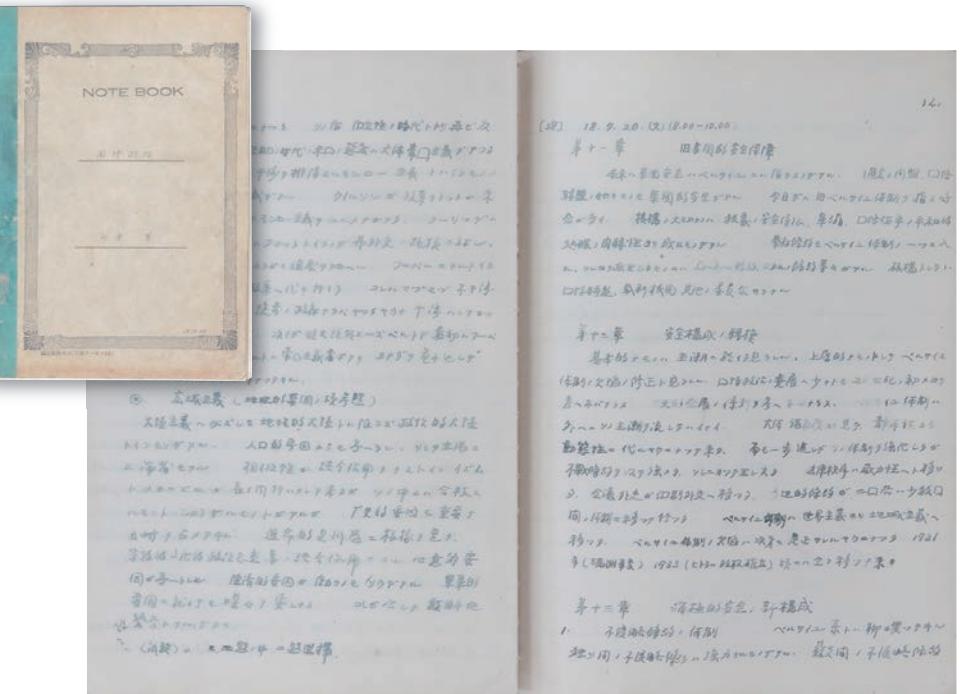


1950年頃の図書館。閲覧席には、1939年から学部入学が認められるようになった女子学生の姿もみえる。

図書館閲覧室風景（「昭和26年度卒業記念 早稲田大学第一理工学部機械工学科」1951年より）

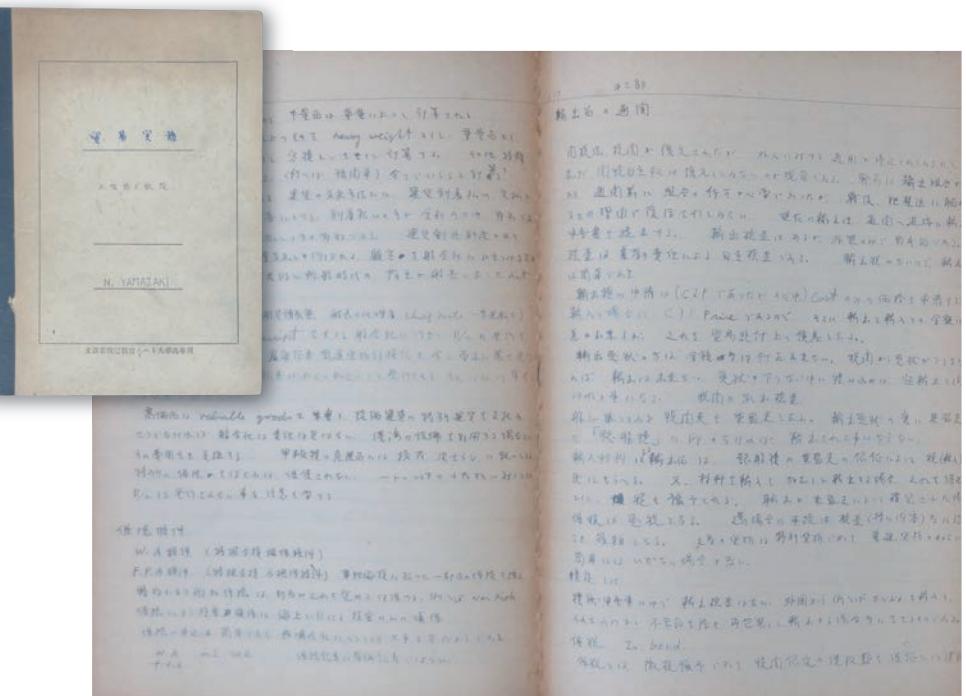


「学生生活の一齣」(「昭和27年第一商学部卒業記念アルバム」1952年より)



講義は現在進行形の世界大戦に言及して締めくくられる。川原篤(政治経済学部教授)は1944年6月に応召。1945年1月、中国の漢口で戦病死。

「国際政治」講義ノート（1943～1944年）川原篤



上坂酉三「貿易実務」受講ノート（1950～1951年頃）山崎直幸（1951年第一商学部卒）

法律上人格、換言すれば法律の執行権利を有する
財産を賄ふる個人を抱き、後者即ち人間
が所有せし法人ト云フ。

法律は純然たるものと意味され得る法人も又
複雑な形態を有する法律の存在を示すものと見
先づモヘルが内歎、高生ジタルに對する解説
次第ニ之ヲ述ブ可シ。

法律の口宣と本質の固有の概念との「已」の關係
有り、且共同時に法律の口宣と本質の固有の概念
の「已」の關係の非ザルモニ反覆之述「已」
一面の法律現象も又同時に一面の社會現象の故
法律の口宣と本質の國家現象と並也「已」の關係
ザル也。

2020年 10月2日発行

発行者 早稲田大学大学史資料センター

〒202-0021 東京都西東京市東伏見3-4-1 東伏見STEP22

TEL: 042-451-1343 / FAX: 042-451-1347

URL <https://www.waseda.jp/culture/archives/>

※本図録に掲載した写真・資料は、展示会場に陳列したもの一部である。

(但し、展示資料は一部変更となる場合がある。)

また、所蔵先が記されていない資料は、早稲田大学大学史資料センター所蔵である。

表紙(表) 図書館閲覧室風景(「政治経済学科卒業記念帖 大正4年」1915年より)

(裏) 田中穂穂「財政学」受講ノート(1917~1918年頃) 金澤雅志(1918年大学部商科卒)

(中) 高田早苗「歐米史」受講ノート(1882年) 山田英太郎(1885年邦語政治科卒)

大山郁夫「國家學原理」受講ノート(1915~1917年頃) 勝田友三郎(1917年大学部政治経済学科卒)

第四節 真正ナル國家觀念。
以上至矣、是既に批評し得る所の如ク某向
自3國字本質ニ關する真正觀念、是「實質的信託」
余、今其件ヨリ取引ヲ取リ、捨シ可ナラ捨テ更ニ
安堵補足行在一定義ヲ提出セシス。

國外ト「限ラル一定地域内」根據ヲ有ル
多數ノ個人ヨリ成ル一定「特殊的共同目的」下
組織セラレ同時、強化機「仓库組織」の事也。
以下元々細説セシム。

1. 國外ノ某1件ニ多數ノ個人及七個人ノ關係、抱擁
ス。而も其時同一の事に複合關係、仙昂の代表
モモ「非斯」。併シ之ヲ單体トテ代表スルト左
Y/存至理由ヲ有シ、其事に於ける「unity
in diversity」、尔モノ實現不以社會的政策也。

2. 國外組織の基礎トシ、其が構成分子タル
多數の個人の結合外、猶ホ一定範囲内に限リ
其土地等ナガル「可ナラズ」、口宣社之「領土」云々。
土地ナガル人物、國民生活」之ヲ口宣する可ナラズ、

3. 國外・強化の共同目的有ス。
口宣、「一面於テ、某之ヲ組織セラル個人間達了目的」
之ヲ、又之ヲ當此に口宣、其共同生活國民の持つ
独立目的有シ、而以各個人の關係ニ率其共同
目的の遂行不以個人規律ス。



大学史資料センター秋季企画展

早稲田で学ぶ—時代のなかの学生と学問

会 期：2020年10月2日(金)～10月30日(金)

会 場：早稲田大学歴史館 企画展示ルーム

開館時間：10:00～16:00